

## 共依存者の「愛」とは何か

——吉村明美『麒麟館グラフィティ』を事例にあげて——

小松原 織 香  
(同志社大学)

小西真理子『共依存の倫理』は人間の「他者への関わり」のあり様について、「共依存概念」を用いながら哲学的な考察を深めた意欲作である。今回は、小西が言及している共依存者の「愛」の概念について、より具体化して描き出すことにより、本書の意義を改めて提示したい。なお、この原稿は合評会で同席していた伊田広行氏が、「支援者」の立場から「共依存者の『愛』」の概念を危険視し、「愛自体が大問題」等の指摘を行い、当事者の「愛」について語ることそのものを否定する発言を行なったことを受けて、執筆した。

### 1 「当事者から支援者への反撃の拠点」 としての本書

共依存概念は、DV やアルコール依存症の問題の支援の現場で培われてきた。この概念は歴史的には「恋愛関係にある男女の間において、男性が加害行為や逸脱行為を繰り返すにも関わらず、女性がその相手を支えて離れていかない」という関係に焦点を当ててきた<sup>1)</sup>。通常であれば、人間は「自らに害を与える相手」に対して、敵意や嫌悪の感情を持ち、「離れよう」と考えるはずである。ところが、一部のDV やアルコール依存症の問題を持つ当事者は、分離を拒絶し、共に暮らすことを望む。これが共依存と呼ばれる関係である。

共依存関係は、人間の「他者への関わり」としては謎に満ちている。なぜ、苦痛に満ちた関係を継続しようとするのか。なぜ、そこから抜け出そうとしないのか。こうした疑問が噴出するため、多くのDV やアルコール依存症の問題の支援者は、共依存概念を用いて当事者の心情を理解しようとしてきた。その結果、多くの場合に支援者は共依存を「当事者の病理的な関係」とであるとみなし「良くない」という評価を下すことになった。

小西はそれに対して、共依存関係にある当事者の視点を取り入れ、その「良くない」とされる関係があることで、生き延びることができた人々の姿を描き出そうとしている。そのことにより、「良くない」関係を求めてし

まった共依存者の、「その中で生きてきた」というリアリティを徹底的に追求するのである。

この点において、私は本書を「当事者から支援者への反撃の拠点」とみなしている。これまでDV 問題では、支援者は二つの視点から批判を加えられてきた。

一つ目は、男性支配的なジェンダー観に基づいた批判である。その批判の多くは「DV を問題化することは、家族関係の破壊である」という危機感に支えられており、「被害者がDV に耐えることで、家族関係が守られる」という主張に繋がるため危険である。

二つ目は、当事者による支援者批判である。たとえば、マツウラ (2005) は、自らがDV サバイバーであることを明示しながら、支援者を痛烈に批判した。この論文は、「支援者もまた被害者を支配し、加害者との関係を再現している」ということを見事に描き出している。この論文は、「当事者から支援者への反撃の拠点」となり得るだろう<sup>2)</sup>。

本書は哲学の研究書でありながら、マツウラの著作に続く「当事者から支援者への反撃の拠点」となるような力を秘めている。小西の支援者批判は「男性支配的なジェンダー観に基づく批判」と混同されることも多いだろう。そのため、(特に支援者からは) 誤読が多発することが予測される。ここでは、本書があくまでも当事者を中心に据えていることをしっかりと押さえておきたい。

### 2 「共依存概念」はなぜ必要か ——フェミニズムの視点を中心に——

それでは、小西は共依存関係の謎にどのように迫って行ったのだろうか。小西は共依存概念の発生と展開を歴史的に読み解いていく。精神医学、心理学、フェミニズム、当事者の言説など多岐にわたる分野で、共依存概念は繰り返し使われてきた。

特に重要であるのは、共依存概念をフェミニストが批判してきたことである。DV 被害者支援に先陣を切って取り組んできたのはフェミニストである。日本において

もそれは間違いのない事実である。ゆえに、「支援者の立場にあるフェミニスト」からも共依存概念に疑いの目が向けられていたということは注目に値する。小西は本書でラディカル・フェミニズムとフェミニスト心理学による共依存批判を取り上げている。その箇所を、本書に沿って以下に簡単にまとめておきたい。(以下のページ数は小西(2017)に依る)

#### (1) ラディカル・フェミニズムによる批判

ラディカル・フェミニストはDVの問題を「社会に蔓延する性差別構造の帰結」として捉えている。DVの被害に遭っている女性たちは、「女性に不利益をもたらす社会構造」に組み込まれるがゆえに、暴力から逃げられないのである。そのことを、「個人的な問題」とみなし、被害者を共依存者としてラベリングすることは、DV問題を脱政治化してしまう。ラディカル・フェミニストにとって、DVの問題は当事者が解決すべき「個人的問題」ではなく、社会変革によって解決すべき「政治的問題」なのである(120-121)。

また、ラディカル・フェミニストは、DV被害者を共依存者とみなすことは、「暴力の原因が被害者にある」とみなすことに繋がるということを指摘した。ラディカル・フェミニストは、DV関係が解消されないのは、「加害者が暴力を振るうことをやめない」ことに原因があり、「被害者が逃げない」ことに原因があるわけではないと主張する。共依存概念を用いることで、DV加害者が免罪される危険性をラディカル・フェミニストは批判したのである(121-122)。

#### (2) フェミニスト心理学による批判

他方、フェミニストカウンセラーは、「フェミニスト心理学」の立場から共依存概念を批判している。フェミニストカウンセラーが指摘するのは、共依存概念が男性中心主義に基づいた回復モデルを用いていることである。

キャロル・ギリガンをはじめとして、フェミニスト心理学の研究者は、女性が男性と異なる心理発達のプロセスを持つことを明らかにしてきた。男性の道徳性が、「自己」が「社会」に対峙して自律性を獲得するという経験を通して発達していくのに対して、女性の道徳性は、「自己」と「他者」との関わりの中でケアをするという経験を通して発達していくのである。この女性の自己発達を基盤とした心理学

が「関係内自己論」である。

男性の心理発達モデルに基づけば、「暴力を振るわれても、加害者のケアをする被害者」は、他者に対して自律性を失っているため、病的であるとみなされる。しかしながら、関係内自己論に基づけば、その被害者は加害者に対して「温かい感受性」を持っていると考えられる。フェミニストカウンセラーは、女性の持つ「暴力を振るわれても、加害者を気遣う」という感受性に対して、病理化する必要はないと主張した。むしろ、被害者がその感受性に基づいて、自己へもケアを向けることが重要だとした。この場合の支援が目指すところは、被害者と加害者の関係を分離させることではなく、両者の繋がりを持ったまま、暴力のない状態へ向かわせることだと考えられる(123-128)。

以上のフェミニズムによる共依存概念への批判は的を射たものである。性差別撤廃に取り組む立場であれば、共依存概念への疑念を持つことは必要である。それでは共依存概念は廃止すべきなのだろうか。小西は、上のように、本書でフェミニズムによる批判を詳細に検討したのちに、共依存概念を用いる意義について、「外的意義」と「内的意義」に分けて論じている。以下で概括しよう。

#### (1) 外的意義

共依存概念を用いる外的意義として、第一には、「名付け」の作用が挙げられる。DV関係の中にいる被害者は、自分が陥っている状況について説明することが困難である。そのときに「共依存」というラベルを手に入れることで、他者と経験を共有し、語るができるようになるのである。第二には、「ケアの負の側面を明らかにする」という作用が挙げられる。フェミニスト心理学はケアの良い面を指摘したが、ケアという行為は、他者に繰り返し与えることで相手の自律性を奪い、自分に縛り付ける支配の方法にもなり得る。すなわち、「ケアをやめることが暴力を止める方法である」ことがある。このことを共依存概念は明らかにするのである。第三には、「関係性を重視する」という作用が挙げられる。DVは被害者と加害者の相互行為という側面があり、どちらかの個人的な経験に集約できない。この「関係性」の問題を共依存概念は可視化するのである(129-133)。

## (2) 内的意義

上で述べた「外的意義」は、DV 関係にある当事者を「共依存」だとみなすことが当事者の理解に繋がり、「回復に役立つ」「支援に役立つ」という点において見出される。他方、小西は「共依存」だとみなされた関係の「内的意義」、すなわち「それ自体の意義」を明らかにしようとしている。この「共依存の内的意義」は、これまでの支援の現場では「回復を妨げる」「支援を拒絶する」ものとして、否定されることが多かった。この内的意義についての小西の主張は、「共依存者の生」をありのままに肯定しようとする本書の試みの、理論的中核を担うことになる。そのため、下で少し詳しく見ておきたい。

はじめに、なぜ支援者が「共依存者の生」をありのままに肯定できないのかについて、現実的な現場の状況を認識しておく必要がある。それは、「命の危険」という切実な問題である。小西は、カウンセラーの信田さよ子の書籍を引用しながら、支援者がアルコール依存症の人を見たときに、「あなたを死なせるわけにはいかない」という感情が自らに湧いてきて、飲酒を続けることを肯定する気にはなれないことを描き出している。支援者の「目の前にいる人をむぎむぎと死なせたくはない」という感情は切実な問題である (133-134)。このことを小西は次のように述べている。

(前略) 明らかに危険な状況を招いている共依存関係を、援助者ないし介入者側としては、安易に容認することなどできないのである。共依存言説で語られるそのような関係性はアルコールや暴力で身体を破壊するような関係性だけではなく、精神的破壊を促すことで死を導く「自殺」のようなものもある。さらに言えば、援助者からしてみれば、アルコール依存症として飲酒し続ける行為やDV 関係にとどまり続ける行為は、「自殺行為」と表現し得るものであるだろう。だからこそ、共依存概念を取り扱う場合、命の問題を考慮せずに、その現象がいかなるものであるかを網羅することはできない (135)。

以上のように、アルコール依存症でもDVでも、暴力を振るわれ殺されるかもしれない被害者を、ありのままに肯定することは支援者にとって難しい。この支援者のリアリティは否定できないものであ

る。

他方、共依存の当事者のリアリティはどのようなものだろうか。小西は、ある元DV被害者女性の手記<sup>3)</sup>を元に考察を重ねている。その女性は、過去において、夫から暴力を振るわれる関係にとどまり、医師から「共依存者」という診断を受けていた。当時の彼女は、DVの中で命の危険を感じ、女性センターでカウンセリングを受けた。彼女がこのカウンセリングに求めていたのは、「別れずに暴力を抜け出した人の話 (136)」を聞くことだった。しかしながら、実際に彼女の身に起きたこととして、カウンセラーからは「『暴力は治りませんよ』と一喝され、シェルターの説明を受けた。帰るころには今すぐ家を出なければならぬかと思いは乱れ、混乱は何日も続いた (136)」と語っている。結局、彼女はシェルターには入らず、夫との関係を継続した。現在は、暴力は止まっている。さらに、彼女は「もしその時にシェルターに入っていたら、こうして彼に夕飯の支度を頼んで原稿を書いている私は、たぶんいない。私は自分の心に気づくこともなく、彼を憎み続けていたかもしれない (136)」と回想している。

この元DV被害者について、小西は次のように述べる。

命を守ることは尊重されるべきであり、分離は間違いなく重要な対処策の一つである。しかし、彼女のような声が存在すること、すなわち、分離ではなく、関係性やつながりを保つなかで、解決の道を探りたいと願う声もあることも、私たちは聞き逃してはならないのではないだろうか。彼女は、客観視すれば完全に否定的で救いようがなく、別れるのが最善の方法にしかみえないような関係性のなかで、何か大切なものを守ろうとしていたのである (136-137)。

以上のように、小西は当事者の「別れたくない」という切実なリアリティを描き出している。このリアリティは「命を賭してでもこの関係の継続を試みよう」とする当事者の切望とも言えるだろう。支援者が「命の危険がある」と言うのに対して、当事者は「では、命を賭けよう」と考えることがある。この支援現場の当事者と支援者のせめぎ合いは、両者の切実なリアリティのせめぎ合いである。

では、当事者が命を賭けてまで守ろうとした「何

か大切なもの」とはなんであるのだろうか。小西はカウンセラーの河野貴代美の書籍を引用しながら、それは「愛」であると、次のように書く。

では、彼女が守ろうとしていたのは、いったい何なのだろうか。その提示には非常に慎重になるべきであるが、ここではそれを「愛」と呼ぶことにする。共依存における「愛」とは、「偽物の愛」あるいは、共依存は愛の「闇の側面」であると否認されるものである。しかし、その「偽物の愛」あるいは、共依存は、愛の「闇の側面」であると否認されるものである。しかし、その「偽物の愛」の関係を築いている本人たちにとっては、それは紛れもない「愛」だと認識されていることがある。あるいは、「本来愛（愛すること）そのものは、狂気＝幻想をひめたもの」ではないだろうか（137）。

この小西の文章は、ある人には「内実のない薄っぺらいもの」として映り、ある人には「異様に説得力のあるもの」として映るだろう。直観的に書こうとしている「何か」があるのはわかるが、まだ不定形のまま輪郭がぼやけており、説明しきれていないからだ。

ただ、私が思うに、この小西の言う共依存者の「愛」というもの自体が、捉えがたく曖昧なものである。割り切れない「何か」、不条理で感情的で壊れやすい「何か」だ。もし、誰かがこの「何か」を論理的に追求すれば、「何か」の存在自体があつという間に霧散してしまい、二度とこの「何か」を捉えることはできないだろう。小西はそうした繊細な「何か」を、共依存者の「愛」と名付けることで掬い上げようとした。ここに、小西の試みの重要性はある。小西は共依存と名付けられる関係、それ自体に意義があると主張するのである。

ここまで、「外的意義」と「内的意義」に分けて、共依存概念を使うことの有用性を見てきた。私は冒頭で「共依存関係は、人間の『他者への関わり』としては謎に満ちている」と書いた。それゆえ、共依存にとどまろうとする当事者は、病理化され、外部から救援が必要だと判断され、一方的に支援者から介入される。支援者の多くは、「共依存関係に守るべき『何か』などない」、もしくは「あってはいけない」とするだろう。なぜなら、共依

存関係に守るべき「何か」があると認めてしまえば、当事者への介入が正当化できなくなるからだ。また、当事者も「何か」を追い求めて、共依存関係につながとめられて、命の危険が増すかもしれない。それでも、小西が描き出すように、時折、当事者には共依存関係の中に「何か」が見えており、それを失いたくないと命がけで守ろうとするのである。

この共依存の当事者が守ろうとする「何か」を「愛」と呼ぶことで、さらに誤解や批判は増えることだろう。他方、「愛」という概念に惹きつけられる人もいるだろう。この「愛」の謎について、次項では本書を離れてもう少し考えてみたい。

### 3 共依存者の「愛」——吉村明美『麒麟館グラフィティー』を事例に——

ここで、少女マンガ作品を事例にして、共依存者の「愛」について、私の視点からより具体的に考えていきたい。取り上げるのは吉村明美<sup>4)</sup>『麒麟館グラフィティー』である。この作品は1986年から1992年まで少女マンガ雑誌『プチコミック』（小学館）で連載され、全13巻の単行本が刊行されている。『プチコミック』の対象読者は、おそらく10代後半から20代前半に設定されており、「性の問題」や「家族問題」など、その世代の読者が直面する社会問題が作品の中に盛り込まれることも多い。『麒麟館グラフィティー』は、DVを作品の中心的なテーマに据えている。この作品で描かれるDVの展開を要約すると、「暴力を振るう夫」から逃げ出した妻が、周囲の温かな人間関係に支えられるうちに、「年下の非暴力的で優しい男性」と恋に落ち、彼と再婚するというものである。典型的なDV被害者の「分離」と「回復」のストーリーである。それにも関わらず、ここで取り上げるのは、この作品が13巻わたって繰り返し執拗に描き出そうとしている「何か」が、共依存者の「愛」だと読めるからである。以下で、共依存者の登場人物を中心に、あらすじを簡単に説明しよう。

『麒麟館グラフィティー』の主な登場人物は妙、菊子、宇佐美の3人で、いずれも20代から30代<sup>5)</sup>で若い。妙は学生向けアパート「麒麟館」の管理人をしており、行き倒れになっていた菊子を助ける。菊子はそのアパートに居候して、学生たちとにぎやかに暮らすところから物語は始まる。実は菊子は、夫の宇佐美に精神的に支配されており、殴られたり蹴られたりも日常茶飯事のDV状態に陥っていた。そのため、家から着の身着のまま逃

げ出してきて、麒麟館にたどり着いた。他方、宇佐美は、妙が片思いをしている初恋の相手であった。この三人の三角関係の恋愛劇と、麒麟館のにぎやかな住人たちとの群像劇が同時に進行することになる。

はじめは宇佐美の妻である菊子に嫉妬していた妙だが、宇佐美のDVの内情を知り、菊子の味方になって友情を深めていく。その中で、宇佐美が菊子を妻にしたのは「従順で言いなりになる道具だから」であることが明らかになっていく。妙は宇佐美を厳しく糾弾し、口論を繰り返す。他方、麒麟館で暮らす菊子は、周囲の温かな愛情の中で、宇佐美の暴力で自尊心を破壊されていたことに、自ら気づいていく。だが、菊子が仕事を見つけて経済的自立を試みても、宇佐美は離婚を拒否し、嫌がらせを繰り返した。それに対して、菊子は宇佐美への怒りを自覚し、「人からどう言われようともうかまいません(吉村 5: 75)」「鬼になって嫌われる道を登ります(吉村 5: 76)」と決意する。5巻までの菊子の心情の変化は、まさにDV被害者の「回復」だと言ってよいだろう。暴力で自律性を奪われていた菊子は、周囲の支援によって、経済的自立を果たし、宇佐美との分離を覚悟するのである。

しかしながら、6巻から事態は急展開を迎える。宇佐美が経営している会社が倒産の危機に陥るのである。宇佐美自身も精神的にショックを受け、立ち直れず、家に引きこもって酒を飲む生活になる。そのことを知った菊子は激しく動揺し、以下のように胸の内を明かす。

…あの人はひどい人だった…/ほかの人にも心があることなんて認めてなかった/心なんて/心なんて紙キレみたいに破り捨てて平気な人だった!/いつもつらかった/私が泣いて叫ぶ声なんか聞こえない/なにを言ってるのかすら聞こうとしない/あの人の怒声/あの人の怒り/殴り飛ばし/謝らせ/それでも止まらない/あんなひどい人いない/自分のことしか考えてない/私つらかった/しあわせだなんて思ったことない/なのに!/…なのにたまらない…/あの人がボロボロになってるのが/…たまらない/…いい気味だって思っただけでいいって/バチが当たったんだってそう思っただけでいいって/何度自分に言い聞かせても…(吉村 6: 21-15)

以上のように、菊子は激しい慟哭の中で、混乱した心情を吐露している。菊子は、宇佐美の暴力の不当さを理解し、怒りを自覚しながらも、弱っている彼を見るとケアが必要だという衝動に突き動かされる。ここで発露し

ているのは菊子の「温かい感受性」である。このとき、菊子は妙に宇佐美を助けるように請う。宇佐美は妙の力で精神的に立ち直り、会社も倒産の危機を免れる。直接的な関わりではないにしろ、菊子は宇佐美をケアすることがやめられないのである。

7巻になると、菊子は宇佐美と対面して、直接対決に挑む。宇佐美は彼女を肉体的にいたぶり、レイプしようとする。菊子はそれを切り返して次のように宇佐美に言う。

…この先あなたに悪意がある限り/私は何度でも抵抗してあげます/なぜなら…たぶん私は/あなたを愛しているから/でもこれは恋じゃありません/出会ってしまったことが身の一部になっているんです/皮ふの下に埋まったトゲのようなあなた/切りとるには深すぎて(吉村 7: 40-42)

菊子は宇佐美にレイプされかけながらも、愛を語っている。この時の菊子は、「加害者の洗脳」や「経済的な依存」が理由で、加害者を愛していると言っているわけではない。菊子は、宇佐美に対して「あなたから逃れられない/逃れたくない」という思いを切々と語っているのである。

その菊子と裏腹に、妙は宇佐美との関係を深めていく。宇佐美もまた、妙の言動には心を乱されるようになり、初めて人間的な感情が芽生える。二人は同意の上で性行為をし、妙は妊娠する(9巻)。だが、妙は菊子を裏切ったという罪悪感から、誰にも言えないまま流産してしまう(10巻)。それを知った菊子は、妙をゆるし、心から妙のことを大事に思う。だが、宇佐美への葛藤を抱えたまま悩み続ける菊子は11巻で倒れる。そこで初めて、妙にこのように語る。

……秀次(引用者注:宇佐美のこと)さんが本気で好きになる相手は/妙さんでなくちゃ……いや…/だけど本気で妙さんを愛するなら……その前に/ほんの少しでも私に気づいてほしいだけ…/こん…こんな女もいたんだ…って思い出してほしいだけ…(吉村 11: 100-101)

ここで逃れる相手を引き止めようとしているのは菊子のほうである。菊子は宇佐美から「逃れられない」だけではなく「求めている」のである。菊子は、宇佐美から暴力を振るわれ、その行為が不当であると認識し、す

に分離が可能になっている。それにも関わらず、まだ菊子は宇佐美を求めているのである。この宇佐美に求めているのは、復縁ではなく「愛」だろう。自らの「愛」に応えるだけの、宇佐美の「愛」を求めているのである。この菊子の声に応えるには、宇佐美が相手を受愛することができるように、変わらなければならない。

他方、宇佐美は妙との関係の中で、自らの暴力性を深く自覚するようになる。「自分の暴力で妙が傷つくこと」、「妙を受愛していること」に動揺する一方、「菊子への暴力では何一つ心を痛めてこなかったこと」、「菊子を受愛していなかったこと」の残酷さを知るのである。そして、最終巻で、宇佐美は菊子に「償いたい」と復縁を申し出る。しかしながら、菊子は、「あなたが受愛しているのは私ではない」と拒絶して、離婚を求めた。宇佐美はそれに応じて、離婚届を差し出して、こう言う。

菊子 俺はおまえを一度も愛さなかったのに / 離婚届を書くときは…つらかったよ / ほかの女を受愛しながらおまえを失うこともつらかったんだ (吉村 13: 137)

この宇佐美の言葉を聞いて、菊子は涙を流して次のように語る。

本当はあなたに手をひかれてずっと… / ずっと同じ人生を歩いていきたくった / ふたりで年をとって泣いたり笑ったり雨が降って雪が降って… / …だからきつと / きつとこれを書くときは胸がつぶれるほど悲しむわ…! / 火野さんを心から受愛しても…この先うんと幸福になっても / あなたを思い出せばきつと泣くわ / あなたは「他人」じゃないもの! / ずっと好きだったんだもの! (吉村 13: 139-140)

上の菊子の言葉の後、二人は固く抱き合う。そのとき、菊子は「抱かれた胸から / 速い鼓動が聞こえた / かすかにふるえていた秀次さんの指が / 死ぬほどいとおしかった… (吉村 13: 144-145)」と感じている。最後まで菊子は、宇佐美を気遣い続け、「愛」を貫くのである。

以上のやり取りの後、菊子と宇佐美は離婚する。宇佐美は妙と海外に移住し、菊子は「非暴力的な優しい男性」である火野と再婚する。見ようによっては、最終的に菊子はDVから逃れて離婚し、「偽物の愛」を捨てて、別の男性と「本物の愛」を実現したと言えるかもしれない。しかしながら、この13巻にわたる物語の中で、菊子が宇佐

美に切実に応答を求め続ける動力となったものこそが、まさに共依存者の「愛」だと言えるだろう。1巻の登場時には、宇佐美は極悪なDV加害者で、「この人は更生しない」ように思われた。それでも宇佐美に「愛」を求めた菊子は非現実的な願望に取り憑かれており、レイプの危機にまで晒されている。その菊子の「愛」は最後まで貫かれる。菊子は宇佐美を気遣い続け、「温かい感受性」を失わなかった。「愛」を信じたのである。以上のような、菊子の「愛」は、「偽物の愛」だったとラベルをつけることで、粉々に破壊されてしまうような、繊細で壊れやすい「何か」である。そして、菊子の心の中心にあり、彼女が命を賭けてでも守りたかったものである。

もちろん、この作品はフィクションであるので、現実的なDVでこのような展開があり得るのか、という疑問はある。多くの場合、宇佐美のような加害者は、最後まで暴力を振るうことをやめられないことが多いからだ。また、この作品で鍵になるのは妙や、麒麟館の住人たちである。DV関係にある二人が、閉鎖的にコミュニケーションを続けるのではなく、周囲との雑多な関わりを持ったからこそ、宇佐美も菊子も変わっていくことができた。菊子のように「愛」を信じれば、DV関係が解消され、お互いの葛藤が解決されると考えることは危険である。菊子が何度も宇佐美に会いに行き暴力を受け、危険に晒されたことを美化することはできない。この作品はあくまでも虚構であって、空想的な物語の一つでしかない。この作品は、DV問題を解決するためのモデルではないのである。

しかしながら、作品内で描かれる菊子の「愛」の表現は、前項で述べた共依存者の「愛」を具体化する手がかりにできる。もちろん、フィクションであるので、この作品を読んだ人が、このように描き出される「愛」に対して、「自分にとって必要ない」「良いと思えない」という感想を持つことも自由である。それでも、誰にも「愛」の形を裁くことはできない。たとえ、他人から見てそれが「愛ではないもの」に見えたとしても、その人にとってリアリティとして迫ってくる「愛」を、周囲の人間が「偽物である」と判断することは暴力的である。共依存者にとっての「愛」を、「愛」と呼ぶことは、当事者の自由であるはずだ。

第一項で本書は「当事者から支援者への反撃の拠点」であると述べた。その意味で、本書が共依存者の「愛」を提起することは、支援者がこれまで排除してきた「何か」を、「愛」という名前をつけて、当事者の手に取り戻す試みだと言える。DV被害者は、自らの加害者への愛を、

「愛」と呼ぶ自由がある。本来、そんなことは当たり前であるはずだが、現在の支援の現場では難しい。だからこそ、本書の意義はある。

## 注

- 1) ここで「男女」としているのは、共依存概念が男女カップルに適用されてきたという歴史的経緯を踏まえている。当然ながら、共依存関係は同性間でも生じる。しかしながら、圧倒的多数のDVは「男性が加害者」であり「女性が被害者」になっており、その暴力は経済的不平等も含めたジェンダー構造を背景としている。また、本稿では引用される事例や作品は、「男性が加害者」で「女性が被害者」のものである。他方、本稿で中核として展開される「共依存者の『愛』」の理論については、同性カップルや「女性が加害者」で「男性が被害者」の共依存関係はもちろん、もしくは友人関係、親子関係、きょうだい関係等で生じる共依存関係への援用も可能であると考えている。
- 2) 同じくDVサバイバーであることを明示して、DV被害者支援の支援者の二次加害を指摘した論文としては、Koyama (2006)が挙げられる。他にも、研究者の立場から、DV被害者支援の「支援者」が二次加害を行う危険があることを指摘した、野坂(2015)等が挙げられる。
- 3) この手記はあさみ(2002)として出版されている。
- 4) 吉村は1980年に『ブチコミック』でデビューして以来、多くの人気作を執筆してきた。吉村は少女マンガ雑誌『フラワーズ』(小学館)2016年2月号に掲載された、『夢の真昼』第26話で、特定の国の外国人観光客に対する人種差別的な描写をしたとして、批判を受けた。この作品は『フラワーズ』2016年3月号で最終回(第27話)を迎えたが、そこでも日本人のルーツは「弥生人」ではなく「縄文人」であると主張し、祖国礼賛をしながら「日本の大地」の「土に還る」という政治的主張を、作品内で行っている。吉村のこれらの主張は明確な差別である。吉村の差別表現については、読者からもweb上で批判の声が上がり、編集部への抗議活動が編集部へのアンケートハガキを通して行われた。その様子は、web上の記録(<https://togetter.com/li/922783>, 2018年7月31日確認)から窺える。(第27話で最終回となったのは、実質的には抗議を受けての連載打ち切りであったと、この記録から推察される)「吉村の差別思想が、これまでの作品にどの時期から反映されているのか」「DV被害者の描き方と、政治的主張の連関はあるのか」等の疑問が湧いてくるが、ここでは詳しく立ち入ることができない。しかしながら、吉村が描いたDV被害者像が、差別的な政治思想に基づいている可能性については、指摘しておきたい。本稿では肯定的に吉村の作品を取り上げているが、非常に危うい面も持った作品でもある。
- 5) 妙は22歳で、菊子は21歳である。宇佐美は明記されていないが、容姿や周りとの関係を見る限り、20代後半から30代前半だろう。のちに菊子と付き合う若い男性の火野は19歳である。この作品は札幌の学生アパート舞台にしており、若者たちが家族や就労の問題に直面しながら成長していく青春群像劇でもある。

る。

## 参考文献

- Emi Koyama (2006) "Disloyal to Feminism: Abuse of Survivors within the Domestic Violence," *Color of Violence: The Incite! Anthology Incite!*, Women of Color Against Violence (eds.), South End Press. (翻訳はエミ・コヤマ「フェミニズムへの不忠」として、活動団体「アウロラ」によって自費出版されたが、現在は入手困難。)
- あさみまな (2002) 『いつか愛せる ——ドメスティックバイオレンス・共依存からの回復』, 星雲社。
- 野坂洋子 (2015) 「DV被害者支援における二次加害とDVの類似性」『現代福祉研究』, 第15号, 141-151。
- マツウラムコ (2005) 「『支援者』/『第三者』の倫理的責任『二次被害』は終わらない ——『支援者』による被害者への暴力」女性学年報, 第26号, 102-123。
- 吉村明美 (1986-1992) 『麒麟館グラフィティ』小学館。(初出:『ブチコミック』1986年4月号~1992年1月号、小学館。引用は単行本(全13巻)を参照した)

